



編集後記 From Editor

大阪府高槻市にある上宮天満宮
では菅原道真公の命日の2月25日
と26日に「天神まつり」を開催。市
民を中心に多くの参拝者が集まる

私は小学校の3年生まで東京の下町で育った。秋には地元の神社でもまつりがあり、御輿と山車が出て、子どもたちも大人と一緒に山車の綱を引っ張って町内をめぐる。楽しかったけれど夢のような記憶。それでも、祭り囃子などを耳にすると、その時の感覚をふと思い出すことがある。

その後、父の仕事の関係で青森市内に引っ越した。東北地方の短い夏に、大群衆が跳ね踊る、ねぶた祭の熱狂を小学生ながらに肌で感じた。企業などが出す大規模なねぶたが有名だが、私の町内でも小ぶりのねぶたをつくって練り出した。まつりの当日、それをまちの人たちみんなで引き出す時の高揚した気分は忘れられない。

大学を卒業し就職してから、私は長年大阪に住んでいる。関西にも京都の祇園祭や大阪の天神祭をはじめとして、各地にさまざまなまつりがある。それが今も受け継がれてきているのは、まさに地域の力があってのことだろう。規模の大小にかかわらず、まつりの中で、人と人とのつながりが深まり、子どもの成長が促されていく。

少し趣は異なるが、かつては、社内運動会や餅つき会など、会社にもいろいろなまつりがあった。昭和の高度成長期の頃、社員の家族も含めた人間関係の中心が、会社の中にあつたからだろう。その後、企業としての効率性がより重要視され始めるとともに、そうした傾向にもブレーキがかかったが、最近では改めてその効用を見直す動きもあるようだ。

運動会やまつりの時には、普段は目立たないのに大活躍する人や大切な役割を果たしている人がいる。そして、まつりが何より第一だという人も。そこには、日常の生活や経済社会の傾向とは少し異なる価値観が存在する。その地域が持っている歴史や独特の文化性に根ざした部分があつてこそ、まつりは価値を持ち、地域の力を育てていくだろう。同時に、地域にそうした力があれば、人と人との新しい関係性の上に、旧来とは異なつたまつりもまた生み出されていく。

準備の期間も含めて、まつりは終わっては始まり、それ自身のサイクルを繰り返していく。そして時代に合わせ、少しずつ生まれ変わる。

本誌も今回で通算100号という大きな節目を迎えた。これはまさしく多くの読者や執筆者の方々からの長い年月にわたるお力添えの賜物であり、皆様への感謝の思いはつきない。再度我が身を引き締め、101号からの新たなスタートに向かいたい。

—— 京 雅也

表紙写真 神戸の南京町で行われる、旧暦正月を祝う「春節祭」。華やかな獅子舞が舞い踊り、さまざまな催しが連日繰り広げられ、大勢の見物客でにぎわう
裏表紙写真 東広島市西条では毎年10月に「酒まつり」を開催。公園には「五千人の居酒屋」が出現する／滋賀県長浜市の「子ども歌舞伎」は、400年以上続く「長浜曳山まつり」の華やかな曳山の上で演じられる／神戸・新長田の鉄人広場で例年秋に行われる「琉球祭」。最後には見物人も一緒になって踊り出す

CEL 100号 特集 ■ “まつり”が育む地域の力

発行●平成24年3月26日 頒価1,000円(送料別途)

■発行 大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 (CEL)
〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2
■発行人 木全吉彦 *Yoshibiko Kimata*
■編集人 京 雅也 *Masaya Kyo* / 弘本由香里 *Yukari Hiromoto*

編集●関西ビジネスインフォメーション(株)内 CEL編集室
〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18
住友中之島ビル7F TEL.06-4803-2212
印刷・製本●日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE © 2012 OSAKA GAS CO., LTD.

禁無断転載複写

※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を表すものではありません。本誌・バックナンバーのコンテンツやエネルギー・文化研究所(CEL)の活動内容はインターネットホームページ[<http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/>]でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は CEL編集室 Tel.06-4803-2212 Fax.06-4803-2210 cel@kbinfo.co.jp まで